

令和2年度日本教職大学院協会研究大会「ポスターセッション」発表者等一覧

| 大学院名 | 学年等 | 氏名 | 現職、修了生の勤務先等 | 成果発表のタイトル・要旨 |
|----------------|-----|--------|---------------------|---|
| 北海道教育大学 大学院 | 修了 | 武田 竜太 | 新十津川町立新十津川中学校 教諭 | 社会的事象・課題を生徒に「自分ごと」として探究させる中学校社会科授業の実践 |
| | | | | 筆者は、北海道教育大学教職大学院(H27-28年度)において、生徒に社会的事象・課題を「自分ごと」として探究させる中学校社会科の授業研究を行った。この研究において「役割体験学習論」(井門正美、1999年)を理論として、地理・歴史・公民3分野のカリキュラムを構築した上で、授業実践を行った。本発表では、修了後の実践も含めて、具体的な実践資料に基づき筆者の社会科教育実践について紹介したい。 |
| 弘前大学 大学院 | 2年 | 坂本 小百合 | 十和田市立北園小学校 教諭 | 学級担任だからできる外国語活動・外国語科の授業づくりー小中連携を生かした英語教育の充実に向けてー |
| | | | | 本研究は、小学校の学級担任が日常的に子どもたちと英語でやり取りできる授業を実現していくために、どのような研修や環境づくりが有効なのかを実践的に明らかにしようとするものである。英語の授業について中学校教員と共に協議する小中合同研修会等の校内研修、クラスルーム・イングリッシュの教室掲示など学級担任が英語で積極的に子どもとやり取りしやすい環境づくりの2つの取組について報告する。 |
| 岩手大学 大学院 | 2年 | 板井 直之 | 盛岡市立桜城小学校 教諭 | 愛好的態度の形成につながる「体づくり運動」の単元開発 |
| | | | | 「豊かなスポーツライフの実現」は、体育科の最終目標であり、指導要領総則においても「現代的な諸課題に対応し求められる資質・能力」の1つとして示されている。この目標を実現させるため、運動や体育に対する「愛好的態度」の形成につながる「体づくり運動」の単元開発を小学校高学年に実施したところ変容が見られた。その方法、開発単元の概要、結果等について報告する。 |
| 宮城教育大学 大学院 | 修了 | 三井 雅視 | 宮城教育大学附属小学校 教諭 | 「関数の考え」の素地を培う学習指導の一試み |
| | | | | 小学校算数では、事象を科学的に処理する能力や態度の育成や、算数の内容の意味理解の深化などの観点から、「関数の考え」の育成が重視されてきた。しかし、そのねらいが十分に達成されているとは言い難い。 「関数の考え」の育成のためには、下学年からの素地指導が重要である。本発表では、その素地指導に焦点を当て、第1、第3学年で取り組んだ授業実践の概要と、その分析を通して得られた成果と課題について発表を行う。 |

| 大学院名 | 学年等 | 氏名 | 現職、修了生の勤務先等 | 成果発表のタイトル・要旨 |
|-------------|-----|-------|-------------------|--|
| 秋田大学 大学院 | 2年 | 遠藤 史都 | ストレートマスター | 小学校国語科において批評的に読む力を育てるNIE教材の開発—対話を期した読み書き関連学習をとおして— |
| | | | | 批評的に読む力（クリティカル・リーディング）を育てるために、共通のテーマについて異なる視点から書かれたテキストを学習することが有効であると考え、新聞教材（記事・投書）の開発を行った。その新聞教材を実際に小学校6年生の学級で実践したところ、実践の前後で児童の批評的読みの向上が見られた。本研究では、批評的読みの力を育てるための新聞教材と教科内容を提案する。 |
| 山形大学 大学院 | 2年 | 半田 智美 | 上山市立北中学校 教諭 | 身近なICTを活用したコミュニケーションによる英語科教員の資質能力の向上 - YouTube, LINE, Google Driveを活用した日常的な交流の在り方の考察 - |
| | | | | K市英語科教員にパフォーマンス・テストのアイデアをYouTubeで限定動画配信、日常的な交流を期待した。パフォーマンス・テストへの関心が強化され、日々の授業で抱えている課題を自由に話し合うことができた。YouTube, LINE, Google Driveを活用した日常的な交流の仕組みを構築し、教員の授業実践に対する意識や、具体的実践にどのような影響を及ぼすかについて考察した結果を報告する。 |
| 福島大学 大学院 | 2年 | 村澤 梨沙 | 福島県立いわき支援学校 教諭 | 知的障害特別支援教育における美術科教育～生徒の思考力・判断力・表現力を高める授業作り～ |
| | | | | 美術を通して育てたい力について整理し、その力を育成するためのカリキュラムの在り方や合理的配慮をしたうえでの授業作りを検討した。生徒の自己実現につなげるために実践した思考力、判断力、表現力を高める授業作りについての発表を行う。 |
| 茨城大学 大学院 | 2年 | 川上 優紀 | 守谷市立愛宕中学校 教諭 | 「深い学び」につながる英語科学習の在り方 — I C Eモデルの視点に基づく授業改善を通して— |
| | | | | 習得した知識・技能を自己の知識や経験とリンクさせていき、より発展的な能力を高める学びのプロセスとして、Youngの提唱したI C Eモデルを挙げることができる。これを基に、新出事項と既習事項とのつながりに配慮した指導や、単元テーマに基づく自己表現活動を取り入れた授業実践の考察を通して、生徒の深い学びを支援し、自らの思いや考えを英語で表現する能力の育成を図る英語科学習の在り方について発表を行う。 |
| 埼玉大学 大学院 | 2年 | 小沢 征司 | ストレートマスター | キャリア教育を視野に入れた中学校数学科の授業についての研究-第2学年における連立方程式の授業実践- |
| | | | | 国内外の学力調査等のアンケートを分析すると数学を学ぶことが将来どのように役立つのかを具体的にイメージすることができない中学生が多くいることがわかった。この課題を解決するためにキャリア教育を視野に入れた数学の授業を研究した。具体的には様々な職業で実際に数学が使われている場面を取り扱った教材を開発・実践した。また実践後、教材や授業の妥当性をキャリア教育、数学教育の両側面から検討したものを発表する。 |

| 大学院名 | 学年等 | 氏名 | 現職、修了生の勤務先等 | 成果発表のタイトル・要旨 |
|---------------|-----|-------|--------------------|---|
| 聖徳大学 大学院 | 修了 | 松永 智美 | 聖徳大学附属第二幼稚園 教頭 | 園生活における主体的な活動に関する研究 |
| | | | | 幼稚園には運動会や発表会等教師が意図した活動がある。そのような時の幼児の主体性はどのようになるのか。また自由な遊びの中で幼児はどのように環境と関わり主体的に活動しているのか、教師の教育上の意図と幼児の主体性との関係を把握する。そして「幼児の主体的な活動」を充実させるために、幼児の思いを受け止めた教師の援助や環境構成についての研究結果と、大学院修了後の勤務園での実践の見直しも含めて報告する。 |
| 千葉大学 大学院 | 修了 | 鈴木 敬 | 千葉市立西の谷小学校 主任主事 | 学校のカリキュラム・マネジメント構築に関する研究 —カリキュラムと教育資源をつなげる若手教職員の職能開発に着目して— |
| | | | | 教育資源マネジメントの実現のため、若手教職員の職能開発の在り方について検証を行った。まず、学校事務職員の教育課程参画と校内研修等との関連を分析し、研修の経験と教育課程参画度との関連を明らかにした。加えて、若手教員に教育資源マネジメント研修を実施し、教育資源の確保の意識が高まることを検証した。これらのことから、カリキュラムと教育資源をつなげる職能開発に、校内若手教職員研修が効果的であることを示す。 |
| 東京学芸大学 大学院 | 2年 | 松原 直也 | 岐阜県立岐阜農林高等学校 教諭 | 高等学校芸術科書道における授業プログラムの開発—「仮名の書」において思考力・判断力・表現力等の育成を図る指導方法の考案とその検証— |
| | | | | 現在、児童及び生徒の思考力・判断力・表現力等を育成することが求められている。しかし、例えば高等学校芸術科書道に関わる実践研究において、思考力・判断力・表現力等の育成に関わった具体的な研究は、多くを確認することができない。そこで、芸術科書道の「仮名の書」、その中でも特に日本人独自の美意識や文化によって形成された「散らし書き」に焦点を当て、作成した授業プログラムのもと実践を行い、検証し、報告を行う。 |
| 創価大学 大学院 | 修了 | 吉田 賢治 | 糸田町立糸田小学校 教諭 | 小学校算数科における数学的思考力を育成する指導に関する一考察 —作問指導の工夫を通して— |
| | | | | 「数学的思考力」は数学的に判断するためにも数学的に表現するためにも必要な力である。また、「数学的思考力」を働かせるためには基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けておく必要がある。本研究では、小学校第6学年児童を対象に、算数科における“作問指導”の検証授業を通して、児童の数学的思考力を育成できるかどうかを考察する。そして、事前・事後アンケートと確認テストを通して、作問指導の成果と課題を報告する。 |
| 玉川大学 大学院 | 1年 | 小塚 祐爾 | 大和市立草柳小学校 教諭 | 小学校第6学年社会科 選挙教育における知識構造の研究 —選挙に関わる制度・投票率の教材化を通して— |
| | | | | 選挙の投票率は平成に入り低下傾向にある。この状況の原因の一端として学校での選挙教育の質が考えられる。選挙教育を含む主権者教育では、社会参加を促し、政治的リテラシーを育むのと同時に、選挙に関する知識を習得させることも重要である。そこで、選挙について初めて学ぶ小学校第6学年社会科にて選挙の意味を確実に習得できるよう、「制度・投票率」を軸に知識構造を確定し、それを基に教材化した授業プランを報告する。 |

| 大学院名 | 学年等 | 氏名 | 現職、修了生の勤務先等 | 成果発表のタイトル・要旨 |
|---------------|-----|--------|--------------------|--|
| 帝京大学 大学院 | 1年 | 濱田 直樹 | 清瀬市立清明小学校 主幹教諭 | これからの情報社会における論理的思考力の育成 ～ペアプログラミングの実践授業を通して～ |
| | | | | PISA調査(2018)の結果から、レベル1以下の層が増加し、情報を探し出し、熟考する思考力が課題であった。本研究で、プログラミング教育の分析と実践授業を通して、児童の論理的思考力の育成を追究した。研究方法は、「ペアプログラミング」(林ほか2019)による協働的な情報交換について、「コードスタジオ」の実践授業を実施した。論理的思考力が、ペア学習によってどのように深まるのか、検証を報告する。 |
| 早稲田大学 大学院 | 修了 | 川崎 真美 | 東京都立国際高等学校 主任教諭 | 高等学校における教科横断的な授業の課題と教科横断検索システムの開発 ～カリキュラム・マネジメントの実現に向けた提言～ |
| | | | | 高等学校では、教科等横断的な授業の実践が難しい。独自実施のアンケート結果から、この授業の実践の課題を明らかにした。課題解決のため、各科目の学習内容を整理し、教科間の関係を検索するシステムを提案し作製した。システムを利用し、教科横断的な学びを可視化した学校カリキュラム表を作成、学校全体での授業研究の常態化、カリキュラム・マネジメントも実現できることを提案する。検索システムの今後の展望も紹介する。 |
| 横浜国立大学 大学院 | 2年 | 山崎 翔 | 横浜市立富岡中学校 主幹教諭 | 開発的・予防的生徒指導の充実をめざした校内支援検討会による教師の変容 ～OODA ループとYP アセスメントを活用した校内支援検討会の実践をもとに～ |
| | | | | 最近の児童生徒の問題行動調査によると、いじめ・不登校・自殺の件数が増加しており、未然防止の観点からも予防的な生徒指導の充実が求められている。そこで教師による意図的な作戦会議(校内支援検討会)を実施し、児童生徒理解への新たな見方を獲得し、実践への意欲の高まりが、悩みを抱える児童生徒への予防的なアプローチに繋がるのではないかと考えた。校内支援検討会の実践が教師の意識や行動に与える影響について報告する。 |
| 山梨大学 大学院 | 2年 | 小松 琢朗 | 北杜市立明野中学校 教諭 | 「数学的に説明する」ことができる生徒の育成 —計算過程をふり返り、式を読む活動に焦点を当てて— |
| | | | | 「数学的に説明する」ためには答えを求める過程をふり返り、その問題の構造をつかむことが必須である。今回は鼓笛隊の行進の場面を数学化し、問題解決していった。その問題解決の過程を文字を用いてふり返る中で、「式を読む」活動に主眼をおき、問題の構造をつかませる授業を行った。この授業を分析・考察した結果、得ることができた「数学的に説明することができる生徒を育成するための手立て」について発表を行う。 |
| 新潟大学 大学院 | 2年 | 飯沼 沙知子 | ストレートマスター | 創造的に考えを巡らせる中学校美術の在り方 ～自己と他者を往還する対話型鑑賞法～ |
| | | | | 中学校美術において創造的に考えを巡らせるとは、造形的な見方・考え方を働かせるということである。造形的な見方・考え方を働かせて思考することによって、生徒が自分としての意味や価値を創り出すという「自分事」となる。造形的な見方・考え方を働かせることに適した授業として、対話型鑑賞法の実践的な授業構想を考える。本研究では、生徒の主体的な鑑賞である対話型鑑賞法について研究をすすめたものである。 |

| 大学院名 | 学年等 | 氏名 | 現職、修了生の勤務先等 | 成果発表のタイトル・要旨 |
|---------------|-----|------------------------|-------------------|--|
| 上越教育大学 大学院 | 2年 | 礪川 祐地 新田 梨乃 林 優花 | ストレートマスター | 情報活用能力の育成を主とした授業づくりの支援 |
| | | | | 学校支援を行った連携協力校への調査で、ICT環境やキーボード入力、プログラミング教育や表現力についての課題が明らかとなった。これらを受け、「ICT環境の整備」、「児童のキーボード入力のスキル向上」、「プログラミング教育に関する授業実践・教員研修」、「表現力の育成」への支援を行った結果、教師のICT活用やプログラミング教育への意識向上、児童の情報活用能力や表現力の育成に一定の効果が得られた。 |
| 富山大学 大学院 | 2年 | 村田 夏樹 | 射水市立下村小学校 教諭 | 小学校教員に求められるキャリア・カウンセリングの実際 |
| | | | | 小学校段階からのキャリア教育の充実が重視されている一方で、小学校でのキャリア・カウンセリングの理解と実践が十分に進んでいない現状がある。そこで、小学校教員が行うキャリア・カウンセリングのスキームについて先行研究を基に明らかにし、そのスキームとキャリアレジリエンスの態度・能力の両側面や学習意欲との関連について、児童質問紙によって調査した。現段階で解明されたことについて報告する。 |
| 金沢大学 | 1年 | 舟木 慎治 | 金沢市立千坂小学校 教諭 | 小学校国語科における主体的に学ぶ子の育成を目指して —「問いの追究サイクル」の構築と「学び方の自覚化」を通して— |
| | | | | 国語科の授業実践を通して主体的に学ぶ子の育成をねらいとしている。主体的な学びには、学んだことへの達成感が必要だと考える。しかし、私は今までの実践の中で「つけたい力を子どもが実感・活用できなかったのではないかと」感じている。そこで、文学的文章の中で子どもが持った問いを軸にした単元づくりを構築、その過程を通して「学び方の自覚化」を目指した実践を行っていこうと計画している。 |
| 福井大学 大学院 | 2年 | 青木 喜一郎 | 福井市森田中学校 教諭 | 学び合い高め合う集団を目指した学校改革マネジメント ～授業研究の転換と共有意識を大切にした学年経営～ |
| | | | | 2030年以降の社会に備え、教育界全体が教育観の転換を迫られている。これにより、学校を支える教員が他者との共有や省察を大切にし、学校を自ら学習する組織にしていくことが必要となる。この現状を直視した本校の取組について、「授業研究」と「学年経営」の二つの側面から発表する。本校と大学院の連携によるコンピテンシーを重視した授業改革、大学院で学習した理論と学校現場での実践の往還について説明する。 |
| 信州大学 大学院 | 2年 | 齋藤 貴弘 | 長野市立篠ノ井西中学校 教諭 | 教職員の協働性向上によるチーム支援体制構築の検討—協働型支援システムとフィロソフィの往還を通して— |
| | | | | 協働的な生徒支援に関する先行事例を参考にして、複数の教職員で学級支援に当たる所謂学年担任制などの協働型支援システムを試行する。同時にそこに至るまでのプロセスや実際にシステムを試行する教職員の言動を分析して、協働性向上の視点で教職員の意識変容を考察する。このような実践やその考察をもとに、中学校での生徒支援、学級・学年経営の場面における教職員のチーム支援体制構築に必要な要件を明らかにする。 |

| 大学院名 | 学年等 | 氏名 | 現職、修了生の勤務先等 | 成果発表のタイトル・要旨 |
|---------------|-----|-------|--------------------|--|
| 岐阜大学 大学院 | 修了 | 加藤 満 | 七宗町立上麻生小学校 教頭 | 学校の強さを活かしたインクルーシブ教育推進モデルの開発 |
| | | | | 今日、通常の学級を含み特別の支援を必要とする子どもの教育的ニーズに応じるインクルーシブ教育システムの構築が求められているが、学校の状況は様々であり、新たな教育課題に対する研修も十分ではない。こうした課題に対して、本研究では、管理職が学校の強さである授業研究を活かして、関係の校務分掌が連携し、情報と観点の統一を図りながら、教員の研修と支援の充実を図るインクルーシブ教育推進モデルを開発した。 |
| 静岡大学 大学院 | 2年 | 柳原 和弘 | 浜松市立庄内小学校 教諭 | 算数科における問題解決能力の育成を実現する単元開発とその実践 ～算数科「データの活用」領域に焦点を当てて～ |
| | | | | 問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力の育成が喫緊の課題である。そこで、問題解決能力を育成する単元開発を行うための調査を実施し、問題解決能力の下位能力の構造化を図った。そして統計的探究サイクル(PPDAC)を複数回、回すことのできるような真正な学習の場を設定した算数科「データの活用」領域の単元を開発しアクションリサーチを行った。結果、問題解決能力を育成する単元の有用性を示すことができた。 |
| 常葉大学 大学院 | 1年 | 河合 祥悟 | 浜松市立二俣小学校 教諭 | 若手教員の力量形成過程に関する研究 ～コルブの経験学習サイクルモデルを基にした「省察」の事例分析を通して～ |
| | | | | 本研究では、教員の力量形成過程をコルブの経験学習サイクルモデルに重ね、若手教員の「省察」場面における「カタリ」の分析から「若手教員はどのように育っているのか」を明らかにすることを目的とする。本研究の対象とする若手教員は、X市教員育成指標の「基礎期」にあたる1～3年目の教員とした。その中で、省察による「カタリ」が可能な2年目及び3年目の教員2名に行った半構造化面接の分析結果について発表を行う。 |
| 愛知教育大学 大学院 | 修了 | 垣谷 英秋 | 豊田市立高岡中学校 教諭 | 個人と学校組織との学びを融合するLesson Studyの研究 ～MBB, SECI, ECRSの手法を導入して～ |
| | | | | 現在の日本では、様々な課題を受け、校内研修についても改革の方向性が打ち出されている。教師研修システムの組織としての検証、修正について、野中郁次郎のMBB、業務改善のためのECRS（イクルス）の視点等のビジネス理論を活用し、個人の学び（SD）、勤務校での学び（OJT）、勤務校外での学び（Off-JT）の3つの学びを関連付けた校内研修のシステムの作成・実践・実証したものを報告する。 |
| 三重大学 大学院 | 2年 | 山本 裕史 | 三重県立城山特別支援学校 教諭 | 重度の障害を持つ子どもたちがともに学ぶための「対話のテーブル」 |
| | | | | 重度の障害を持つ子どもたちの対話的な学びを実現するため、まず対話の本質を明らかにした上で、その支援を行うことを考えた。共同的な学びの本質を「共同注意」、「共同的確信」、「共同行為」ととらえ、これら3つの柱からなる「対話のテーブル」をデザインした。そして、このデザインの有効性を確かめる予備調査を教員対象に行った。この「対話のテーブル」の理論的背景と教員対象に行った実践について発表を行う。 |

| 大学院名 | 学年等 | 氏名 | 現職、修了生の勤務先等 | 成果発表のタイトル・要旨 |
|---------------|-----|--------|---------------------|---|
| 滋賀大学 大学院 | 修了 | 吉川 健太 | 長浜市立長浜西中学校 教諭 | 生徒が参加・理解することができる社会科授業のデザイン - 中学校社会科の授業実践を通して - |
| | | | | 授業のUDモデルの階層における「参加」と「理解」に焦点を当てて、中学校社会科の授業をデザインした。すなわち、①ICTによる視覚的支援（参加）②板書内容を精選したワークシート（参加）③必然性のあるグループワーク（理解）の3つの手立てを仕組んだ。また、単元レベルでの生徒の学びの変容を読み取るため一枚ポートフォリオ評価を採用した。さらに単元前後の生徒の論述の変化を、テキストマイニングにより解析した。 |
| 京都教育大学 大学院 | 修了 | 柴崎 朱音 | 大阪市立今市中学校 教諭 | プロセスレコードは現場でどう活用できるのか |
| | | | | 日常のある場面を切り取って、教師と子どもの関わり合いを描くプロセスレコード。心に留まった場面を文章化することにより、より客観的に自分と子どもとの関わり合いを省察することができるものである。しかし、目まぐるしく過ぎていく学校現場での一場面をゆっくりと文章に書き起こすことは、多忙な教師にとって難しいことかもしれない。そこで今回は実際に現場でプロセスレコードを作った実践と活用の在り方について報告する。 |
| 立命館大学 大学院 | 2年 | 犬飼 龍馬 | 立命館守山中学校・高等学校 教諭 | 方略の活用で読みの深まりを促す一教具「読み深めカード」の取り組み |
| | | | | 高い読解力を持つ学習者は方略を活用しており、その方略を活用することは読解力に課題がある学習者にも有効であるというSchunk&Rice（1989）の研究がある。そこで本発表では方略を53のワンフレーズに整理し、トランプ大のカードにした。このカードを「読み深めカード」と名付けた。本発表ではこのカードを活用する学習活動を通して、学習者が読解方略を獲得し、それをテキストに応じて使い分け、より深い読みを創造したことを明らかにする。 |
| 大阪教育大学 大学院 | 修了 | 平山 いづみ | 守口市教育委員会 指導主事 | 学級担任支援における特別支援教育コーディネーターの新たな役割 |
| | | | | 本実践は、経験の浅い教員が多く、授業での援助ニーズのある児童への教師の関わりが不十分であり、特別支援教育コーディネーター（以下特支Co）が明確に位置づけられていない小学校で実施した。まず、報告者が通常学級担任としてすべての児童に役立つ「授業の手立てと観点」を明らかにし、それを基に特支Coとして学級担任の学級経営等の支援を行った。本実践を通して特支Coの学級担任支援という新たな役割について提案する。 |
| 兵庫教育大学 大学院 | 2年 | 脇田 佐知子 | 名古屋市立植田東小学校 教諭 | 小学校総合的な学習の時間におけるグローバル教育の試み |
| | | | | 小学校5年生を対象に総合的な学習の時間において、「食品ロス」をテーマにプロジェクト型のグローバル教育を実践した。この学習により児童の「食品ロス」や地球規模の課題に対する意識や行動にどのような影響があるのかを調査した。その結果、児童の課題に対する「社会認識」や「自己認識」は深化し、「問題解決に向けた行動への参加」の意欲を高めることにつながることが明らかになった。 |

| 大学院名 | 学年等 | 氏名 | 現職、修了生の勤務先等 | 成果発表のタイトル・要旨 |
|---------------|-----|-------|------------------|---|
| 奈良教育大学 大学院 | 2年 | 山岡 昂 | 奈良県立郡山高等学校 教諭 | 高等学校数学教育におけるICTの効果的な活用について — 興味・関心の向上や実感の伴う深い理解に関する生徒の意識変容 — |
| | | | | これまでの教職経験から、高校数学に対する生徒の興味・関心が低いことや実感の伴う深い理解がなされていないことを課題と感じていた。これらの課題を克服するために、ICT活用を時間短縮と課題解決の二つの側面から捉え、「学習内容の提示に関わる活用分類」を基にした授業を実践した。本実践での生徒の具体的な反応をもとに、高校数学でICTを活用して学習内容を提示する際に、もつべき視点や留意事項を整理し報告する。 |
| 和歌山大学 大学院 | 2年 | 谷川 真美 | 橋本市立隅田小学校 教諭 | 「考えることを楽しむ子」の育成 ～算数科の授業における自立と協働を通して～ |
| | | | | 新学習指導要領において、社会で生きて働く資質・能力の育成、人間ならではの「考える」ことが今後さらに重要視されていく。勤務校では学力の低さが長年課題となっている。そこで、学力の根本である「考えることを楽しむ子」の育成を目指して研究に取り組んでいる。自分の学びを客観視する「算ストーリー」の取組、職員間で目指す子どもの姿を明確にするためのループリック作成を中心とした校内研修の改善についての報告を行う。 |
| 島根大学 大学院 | 2年 | 松原 透 | ストレートマスター | 小学校における授業内外を通じた防災・減災教育のあり方に関する一考察 |
| | | | | 本実践研究は小学校における主に理科学習を中心とした防災・減災に関わる児童の学びについて、そのあり方を考察・提案するものである。主に、野外での学習および児童へのアンケート結果から、児童の防災・減災に関わる意識や、地域の違いによる予測される自然災害の種類が異なることも明らかとなった。すなわち、防災・減災教育は授業内外の様々なチャンネルを用いながら、主に授業の中で意識や行動を喚起する内容を学ぶ機会を用意することが重要である。 |
| 岡山大学 大学院 | 2年 | 森田 美和 | ストレートマスター | 学校と社会をつなぐ学習の開発 —家庭科におけるサービス・ラーニングを中心としたカリキュラム・マネジメント— |
| | | | | 現在、求められている「地域とともにある学校」づくりには「教育課程を介して学校と地域がつながること」が必要であるとされている。学校と地域社会をつなぐために有効であると考えられる学習方法「サービス・ラーニング」に着目し、家庭科を中心とした具体的なカリキュラムを構想する。学校運営協議会制度を活かし、教科横断的な視点、カリキュラム・マネジメントの視点で吟味し、課題とその解決策について検討したい。 |
| 広島大学 大学院 | 1年 | 辰崎 圭 | 呉市立呉中央小学校 教諭 | 統計的問題解決力を育成する算数科授業の開発 —統計教育カリキュラムの国際比較に基づく評価指標の開発を通して— |
| | | | | 算数科授業において、小学校低学年からの統計的問題解決力の育成に向け、統計に関する海外・日本・先行研究における評価指標を比較・融合し、新たな評価指標の開発を通じた実践を行った結果、第3学年の統計的問題解決力の育成に概ね有効であったことから、本研究は小学校低学年からの統計的問題解決力の育成への可能性を示唆しているものとする。新たな評価指標の開発、授業実践、児童の変容とその評価等について発表する。 |

| 大学院名 | 学年等 | 氏名 | 現職、修了生の勤務先等 | 成果発表のタイトル・要旨 |
|---------------|-----|--------|---------------------|---|
| 山口大学 大学院 | 2年 | 小森 晃子 | 下関市立夢が丘中学校 教諭 | 学校の組織力向上を目指して － 3小1中施設分離型中学校区における小中連携教育の取組を通して－ |
| | | | | 地域全体で子どもたちの学びや成長を支え、「学校を核とした地域づくり」「地域とともにある学校づくり」を推進するためには中学校区を一まとまりとした組織運営が求められる。そこで本研究は、地域の核となる小中学校の連携教育を推進し、学校の組織力向上を目指すものとする。小中共通教職員組織の編成によるプロジェクトリーダーを中心に、小中地域連携カリキュラムの作成や地域学校協働活動の重点取組である「あいさつ」の活性化をめざした実践について報告する。 |
| 鳴門教育大学 大学院 | 2年 | 大杉 信吾 | 静岡県立掛川西高等学校 教諭 | 次世代を生きる高校生の資質・能力育成を促す教職員の組織的協働の展開 －「勇気づけ教育」と生徒の目的意識醸成の組織的実践を通して－ |
| | | | | 生徒の課題をエビデンスベースで可視化した。その実態と育成したい資質・能力（自己有用感、主体性、協働性、創造性）を結びつけ、組織的省察を通して具体的取組を策定した。生徒の課題を踏まえた「勇気づけ教育」をベースに、自律的な学びを生み出すための目的意識醸成、生徒相互の協働を通じた地域課題探究等が策定され、組織的に実践された。中間評価から、生徒の自律的な学びと社会貢献意識、教職員の協働の促進が確認された。 |
| 香川大学 大学院 | 修了 | 川口 千奈理 | 高松市立川添小学校 教諭 | 小学校における自己評価を生かした若年教員研修システムに関する研究 |
| | | | | 若年教員は、同じ経験年数であっても課題意識は多様であり、研修へのニーズも多様である。そこで、若年教員が自己評価により自らの資質・能力を見える化し、自らの課題意識にもとづいて資質・能力を高めていく、自己啓発型の研修の在り方を探った。本研究では、若年教員研修システムとして4つのツールを開発し、効果を分析した。研究2年目にあたる本年度も1年目と同様に、4つのツールの実践に取り組み、効果を分析している。 |
| 愛媛大学 大学院 | 2年 | 宝本 将 | 宇和島市立吉田中学校 教諭 | コミュニティ・スクールの可能性 ～導入効果の検証と具体的実践を通して～ |
| | | | | コミュニティ・スクール（以下CS）が導入されたことによる成果と課題を、市内全教職員と抽出生徒の意識調査から分析する。導入後1年間の変化と、CS導入期間の差の2つの視点から検証を行う。その結果を踏まえた勤務校での具体的実践を通して、効果的なCSの在り方を「働き方改革（地域コーディネーターの役割）」「カリキュラム・マネジメント」「生徒主体の地域連携」「つながりが生む効果」の4つの視点から提案する。 |
| 高知大学 大学院 | 2年 | 近藤 修史 | 高知大学教育学部附属小学校 教諭 | 抽出個別指導と一斉指導の機能的な関連を図る算数科指導法の検討－三段階指導の観点から－ |
| | | | | 本研究は、抽出個別指導と一斉指導の機能的な関連を図る指導法の検討を目的とした実践研究である。具体的には、小学校第1学年児童を対象に「数処理領域」「数概念領域」「計算領域」で見られる困難さに対して、個々の認知特性や行動特性に応じた自作のパワーポイント教材を用いて指導内容や指導方法を工夫改善し、その効果を検証した。ここでは、正確性を指標とした数量把握や計算に関する指導の効果について発表を行う。 |

| 大学院名 | 学年等 | 氏名 | 現職、修了生の勤務先等 | 成果発表のタイトル・要旨 |
|---------------|-----|--------|-------------------|--|
| 福岡教育大学 大学院 | 2年 | 重富 かおり | 新宮町立新宮中学校 教諭 | 本人参加型不登校支援会議による不登校・不登校傾向の中学生の支援 |
| | | | | 本人参加型不登校支援会議とは、本人及び本人を取り巻く関係者一同が支援会議に参加し、生徒本人の気持ちや意向を聞き取りながら援助案を考え、生徒が意思決定していく会議である。本人参加型不登校支援会議を不登校傾向の8名の中学生に個別に実施し、6名の生徒に学校滞在時数の増加などの不適応改善の兆しが見られた。会議開催までの手続きや会議の実際、その後の具体的な生徒の変容などをもとに、今後の改善策を考察した。 |
| 佐賀大学 大学院 | 2年 | 岩谷 祥史 | 佐賀県立白石高等学校 教諭 | 学校の特性に応じた教育課程編成及びクラス編制を実現するための組織マネジメント |
| | | | | 現任校は3年前に再編統合した高校（普通科3クラス、商業系学科2クラス）で「国公立大学進学対応の画一的な教育課程」と「文理コース分けて40人単位のクラス編成が困難」という2つの課題を抱えている。その課題解決に向けて、ミドルリーダーを含むワーキンググループが中心的な役割を担い、コッターの組織改革のプロセスに沿って学校改善を行う。そのプロセスの中で教員の協働を促そうとする取り組みについて発表を行う。 |
| 長崎大学 大学院 | 2年 | 鵜林 慎平 | ストレートマスター | 思考力を育む高校日本史授業の開発と実践 ～歴史的思考力の育成に焦点を当てて～ |
| | | | | 本発表では、新学習指導要領の目標を踏まえながら歴史教育において求められる「歴史的思考力」に焦点を当て、その育成に効果的な授業の方法や手立てについて考察する。 |
| 熊本大学 大学院 | 修了 | 江良 友一 | 熊本市立田底小学校 教諭 | 学校教育目標の具現化に向けて「対話」と「共有」を大切にした実践—ミドルリーダーの立場からの学校改善の取組を通して— |
| | | | | カリキュラム・マネジメントの目的は、学校教育目標の具現化である。しかし、学校教育目標について、管理職以外の理解が十分でないことや当事者意識が低いことが課題としてみられた。そこで、ミドルリーダーの立場から、ワークショップを手段として「対話」と「共有」を大切に、教職員が各自の強みをいかしながら当事者意識をもって学校教育目標の具現化に向けて取り組んだ実践を報告する。 |
| 大分大学 大学院 | 2年 | 城内 一孝 | 日出町立日出小学校 主幹教諭 | 学年部会を活用した若手教員の力量形成に関する研究—学び合いを通じた協働の促進を中心に— |
| | | | | 低・中・高学年の学年段階によって組織される学年部チームの協働に焦点を当てる。学年部会を若手教員のみならずベテラン教員も互いの実践から学び合う場として機能させ、校内研究・研修と連動させながら学年部における協働の促進を図った。本発表においては、学年部チームの協働が若手教員の力量形成に及ぼした効果について報告する。 |

| 大学院名 | 学年等 | 氏名 | 現職、修了生の勤務先等 | 成果発表のタイトル・要旨 |
|--------------|-----|-------|-------------------|---|
| 宮崎大学 大学院 | 2年 | 土持 庸平 | ストレートマスター | 文章中のレトリックに着目させる授業作り —高等学校新科目「文学国語」の指導のあり方— |
| | | | | 「修辞」（レトリック）という語は、改訂される高校国語学習指導要領の中で、現代の国語・古典探究・文学国語に登場し、以前より重視されている。そこで、「文学国語」の履修が想定される高校二年生に対して、レトリックについての知識と、文章を読む際にどれだけそれを意識しているかの実態調査を行い、その結果を踏まえた新科目「文学国語」を想定した授業構想及び予備実践を行った。今回は、その概要についての提案発表を行う。 |
| 鹿児島大学 大学院 | 2年 | 日置 尊仁 | 霧島市立青葉小学校 教諭 | 特別支援教育の視点を取り入れた指導の有用性の検討 —小学3年生の算数科授業を通して— |
| | | | | 今年度、担任している学級には、特別な配慮を必要とする児童が3割程度おり、学習面や行動面で困難を示している。この現状を踏まえ、小学3年生の算数科「数と計算」領域の授業において、「模倣」によるグループ学習を行ったり授業をユニバーサルデザイン化したりするなど、特別支援教育の視点を取り入れた授業改善を行っている。現在、その取組は継続中であるが、とくに抽出児童の変容からその有用性について明らかになりつつある。 |
| 琉球大学 大学院 | 2年 | 上村 千安 | 沖縄県立那覇西高等学校 教諭 | 探究的学習がもたらす学習の効果—思考力育成を目指した高校国語の授業実践— |
| | | | | 新高等学校学習指導要領では「総合的な探究の時間」をはじめ、「古典探究」や「地理探究」など「探究」の名が付された科目が多く設けられている。探究的学習は、PISA調査で指摘される課題の一つ「思考力・判断力・表現力等」を育成する学習方法としても注目される。昨年度の実習で得られた知見をベースに、探究的学習が生徒の学びにどのような効果を与えるのか、「思考力」に着目して検証し、その成果と課題について報告する。 |